



お手軽一畳サイズ 発掘実習ミニブース



和歌山県 和歌山市消防局

事例類型	Ⅱ 高度化・専門化
取組期間	平成 30 年 1 月から

背景

当消防局は、平成26年度に5つあった消防署を3つの消防署に再編した。この際、各消防署に指揮調査隊を設置したことに合わせて、本部で行っていた一定規模以上の火災調査を規模にかかわらず全て消防署で行うようにした。スムーズな事務移管のため、できる限りの研修を行ったが、長年本部調査班が主となり火災の調査を行ってきたことが、署員の技術向上の機会を奪ってきた形となり、とりわけ若年職員の経験不足を効果的に補う方策が求められた。

火災調査技術の向上策として効果的なのは、消防大学校や府県消防学校で行われる「模擬家屋調査実習」であるが、この調査実習の実施は、「多額の費用がかかる」「実施する場所がない」「処分をどうするか」などの懸案材料が多く、なかなか実施することが困難である。

一方、若年職員からは「現場で発掘調査をしたことがない」「どのように現場で火災調査を進めたらよいかわからない」「発掘の実習をしてもらいたい」といった声があがった。



発掘実習といえばコレ？

内容

1. これらの課題を解決するものとして「発掘実習ミニブース」の作成に取り組んだ。

大きさはコンパネ1枚サイズ（一畳サイズ）であり、居間の隅をイメージしている。廃材の利用で作成可能であり、工夫によっては、ほぼ0円での作成が可能である。床と壁2面だけの簡単な作りである。コンセントを取り付けたり、家具や家財を配置したり、手持ちの材料に合わせて自由に作成することが可能である。



ベースはコンパネ3枚



棚、物干し、ゴザ、家電、座布団などで部屋の片隅を再現



現場さながらな燃焼後の状況

ブースを利用した現場さながらの実習の例

警察との打ち合わせ方法、発掘に入るまでの説明、写真の撮り方、図面の引き方、焼けの見方、簡易鑑定、使用立証、電気配線の追いや撮影方法、番号札、丸印、白鎖の使い方、油分検知管の使い方、復元、床洗浄、居住者への原因の説明、損害届出書の説明など



このサイズでも出火原因の特定は容易ではありません。



情報は警察含めて全員で共有します。



都会は燃焼場所の確保が最も困難な問題かもしれません。

2. 発掘実習ミニブースの利点

- (1) 廃品利用による低費用（0円も可能）
- (2) 複数のブースの作成が可能
- (3) 軽トラックにより移動可能であり、燃焼場所と研修場所の分離、複数の場所での研修が可能
- (4) 焼損物を元に戻すことにより繰返し研修が可能
- (5) 研修時間や対象人数に応じたフレキシブルな研修スタイルが可能
- (6) 出火時の撮影ビデオの確認による明確な答え合わせが可能
- (7) 実施後は、ミニブースを小さく切り刻むことでゴミ袋等での一般ごみとしての処理が可能
- (8) 小規模消防本部や署単位での実施が可能

3. 課題

模擬家屋ほどではないが、炎と煙が出るため燃焼させる場所の確保が課題である。なお、消防学校など燃焼実習ができる場所へブースを移動することは可能である。

成果

発掘実習ミニブースでの実習に参加した職員からは「はじめて発掘に携われた」「現場の流れがわかった」などの声が聞かれ、職員に対して効果的な研修を実施することができた。

特記事項

火災調査技術の向上は多くの本部で課題となっているところであるが、各種消防関係広報誌に発掘実習ミニブースの記事が掲載されたところ複数の消防本部から問い合わせがあり、実際に実践してみたという本部もあると聞いている。この発掘実習ミニブースは小規模本部をはじめ各本部の技術向上の一助になると確信している。